

三島由紀夫 生誕100年

今秋よむべき作品とは…

白百合女子大学教授 井上 隆史



対談本『三島由紀夫と唯識』
（竹村牧男・井上隆史、青土社）

今年、生誕100年を迎えた三島由紀夫。本紙（2025年1月10日付、24日付）でも二度にわたって取り上げたが、各地で記念イベントが続いている。

『豊饒の海』四部作

この機会にぜひ、小説『豊饒の海』に挑戦してみよう。文庫本4冊という重量感はあるが、読後の達成感は格別だ。

以下、あらすじを紹介する。ネタバレを含むが心配はいらない。その理由は後で述べる。

『豊饒の海』は、主人公が生まれ変わり死にゆく物語である。だが、単なるファンタジーやおとぎ話、怪異譚ではなく、転生というモチーフを通じて、近代日本の精神史を追及し、同時に世界の存在をめぐる根源的課題を問う哲学小説でもある。

第一巻『春の雪』は、大正の初め、1910年代の物語。主人公の貴族の青年は恋に破れ、病を得て世を去る。

そして第二巻『奔馬』で、昭和初期、30年代の日本に右翼青年として生まれ変わる。彼はテロを企てるが、事前に発覚して逮捕。裁判では、第一巻の主人公の親友である本多が弁護を担当し、無罪釈放に至る。ところが

あれこれと策を弄した本多は、別荘へ彼女を招いて、隣室の覗き穴から彼女の裸体をくまなく覗こうとする。

ところが覗いてみると、彼女はある中年の日本人女性とシズ・ビアン行為に耽つていた。そして、彼女の腋には、生まれ変わりの印である黒子が歴々と現れていたのである。本多は衝撃を受ける。本多の恋などみるのはさすがに、自分は輪廻の環から疎外された存在なのだ、と思



大本営写真班撮影『日露戦役写真帖』第2巻
小川一真出版部、明37年11月（得利寺戦死者ノ弔祭）

い知らされたのだ。第四巻『天人五衰』の舞台は70年代の日本。三島は70年に自決しているの、彼は自らの死後の世界を書いたことになる。

老境の本多は、腋に黒子のあ

る若者と出会い、養子に迎える。だが、彼はフェイク——偽物の生まれ変わりだった。

最後に本多は、第一巻の主人公の恋人で、後に尼寺に入り門跡（住職）となった女性に会うため奈良の寺を訪ねる。しかし

これと云つて奇巧のない、閑雅な、明るくひらいた御庭である。数珠を繰るやうな蟬の音がここを領してゐる。

そのほかには何一つ音となく、寂寞を極めてゐる。この庭には何も無い。記憶もなければ何も無いところへ、自分分は来てしまつたと本多は思つた。

庭は夏の日ざかりの日を浴びてしんとしてゐる。……

二つの読解の可能性

ここでは二つの読解の可能性を示そう。

第一に、先にも示唆したとおり、これを近代日本の精神史として捉えること。この小説には、荒涼たる土地で行われた日露戦争の慰霊祭の写真の光景が、繰り返し描かれる。

明治維新後の近代化の一つの到達点であるはずの日露戦争だが、写真が物語るのは果てしな

この原稿を出版社に渡したその日に、三島由紀夫は自決した。占領期にわずか9カ月余りで作られた新憲法が、日本という共同体を骨抜きにしたと批判し、命を懸けて憲法改正を訴えたのである。

だが、それだけが死の理由だったのか。55年を経た今も、全ては謎に包まれている。

先に、ネタバレを含むが心配はいらないと述べたが、その理由はここにある。つまり、読了したときに、初めて読者の心の

中で、謎解きが始まるからだ。読後の達成感は格別だという言い方も、不正確かもしれない。むしろ、読み終わった者のみに、いったいこの小説は何を語っているのか知りたいという探究心が芽生えるのである。

作品を共に考える

考えてみれば、転生もまた同様に、おのおのの個性はそれぞれに滅びるからこそ、次の生へと生まれ変わる。この見方を拡張するなら、「記憶もなければ何もない」という結末も、単なる絶望的なニヒリズムではなく、全てが滅するがゆえに新しい何かが生じる始点として読み替えられるのではないだろうか。では、その「新しい何か」とは？

私は国際交流基金のお招きにより9月にハンガリーとセルビアを訪れ、『豊饒の海』について語った。かの地にも多くの愛読者がいて、「その新しさ」と思

ふ。もし唯識仏教にさらに踏み込みたい方には、私が仏教学の泰斗・竹村牧男先生に、さまざまな疑問をぶつけた対談本『三島由紀夫と唯識』（竹村牧男・井上隆史、青土社）をお勧めする。



俳人・翻訳家のヴィハル・ユディットさん（左）と筆者。ハンガリー、ブダペストで（2025年9月23日）